

「キリストの日に備えて」(フィリピー一章二―一節)

1 喜びの手紙

聖書のはじめから終わりまで喜び、という言葉の出ない箇所は一つもないといって間違いありません。

皆さんの耳に今日の礼拝の招きの言葉はまだ残っているでしょうか。詩編の言葉は私どもに「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え、喜び歌って御前に進み出よ」と呼びかけていました。喜びが私どもを神に向かわせ、神へと導きます。御前に立つ、立つことを許されるということは、憂いや悲しみを後にすることです。

あるいはキリストの福音、福音という言葉。これも皆さんご存じのように、喜びの知らせという意味です。キリストは喜びをもたらすのです。信仰者はつねに喜びに満たされ苦難のときも喜ぶ(ローマ5:3)。それが福音のもたらすもの、福音が私どもに与える賜物です。

この喜びを、他のどの手紙よりも多く語ったのが、今日のフィリピーの信徒への手紙です。それは獄中でしたためられたものです。にもかかわらずそれは明らかに喜びの書簡です。

あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもつて祈っています(4)。

この箇所を最初として、数えて見ると、この長くないフィリピーの手紙に喜びが一三回も出てきます。

このように喜びという言葉が多く使われる一つの理由は、フィリピーの教会とパウロとの関係がきわめて親密だったということにあると思います。フィリピーに伝道したのはパウロです。使徒言行録によれば、ある安息日、町の門を出て、祈りの場所とされていた川岸に集まっていた婦人たちに話をしたことがはじまりで、リディアという一人の婦人と家族の者が洗礼を受けたと書いてあります。そこからフィリピー教会は生まれました(16章)。

その後フィリピーの教会は獄中のパウロを慰めるため金銭を集めてエパフロデイトを使者として持つて行かせた。フィリピーの信徒への手紙は、その御礼をかね、近況の報告を書いてフィリピーに帰るエパフロデイトにパウロが託した手紙です。そこでパウロはフィリピーの信徒たちを「わたしの喜びであり、冠である愛する人たち」(4:1)と呼んでいるのです。

しかし「喜び」という言葉はこうした親密な関わりを表すだけではありません。その例を二つ、フィリピー書から上げておきたいと思えます。一つは一章二五節です。「あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように」。口語訳は「あなたがたの信仰を進ませ、その喜びを得させようと思う」です。信仰が喜びへ進んでいくことをいっています。喜びこそ信仰の真理、信仰の具体的な姿であるということです。他のと

ころでは、喜びは御霊の実りとされています（ガラテヤ 5:22）。信仰は聖霊によって喜びとなるのです。

もう一つは、二章一七節です。「たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます」。獄中にあるパウロは殉教さえ考えざるをえなかった（1:20-23）。しかしたとえそうであっても彼のその信仰の喜びは変わらない。その喜びは「にもかかわらず」の喜びです。私どもの外面の生活にそれは左右されない。それによつてあらわれたり、消えたりしない。私どもの内側に喚起されるもの、内側から湧き出るものです。こうした喜び、信仰の喜び、内側からの喜び、それがフィリピの手紙を支配している喜びであったのです。

2 キリストの日までに

こうしてパウロは喜びをもって祈り、フィリピ教会のことで、その一人一人の信徒のことで、神に感謝しています。その中で彼らのことで「確信」してやまないことを次のように書いています。

あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています（9）。

「その業を成し遂げてくださる」。 「成し遂げてくださる」は口語訳では「完成してください」です。未来形です。

「善い業」とは私どもの信仰のことでしょうか。信仰を中心とした私どもに対する神の恵みの働きです。それを「始められた方」というのは神です。ですから私どもに信仰を与えてくださった方、すなわち神は、それを完成してくださるといふのがその意味で、力強い御言葉です。

ただその完成は「キリスト・イエスの日までに」です。パウロは私どもが死ぬとき、までに完成してくださるといっているではありません。それは私どもがこの聖書の言葉を、個人的・私的に、ただ自分一人の救いの完成とだけ受け取られてはならないことに注意を促しています。

「キリスト・イエスの日」、または簡単に「キリストの日」（10）というのは、キリストの再臨と審判の日を指す決まった言い方です。歴史の終わり、終末の時です。その時、すでにいまも行われているキリストの支配は、罪も死も、悪魔的勢力もすべて打ち破られて、完全に実現します（第一コリント 15:23-28）。このキリストの日の勝利とともに私どもの救いも完成されるのです。

先日、必要があつて雑誌のバックナンバーを見ていたら、たまたま書評欄に興味深い文章があつてついよみふけてしまいました。岩手県の歴史ある中堅の教会の牧師がこのようなことを書いていました。伝道開始百周年を迎えて（今は一一三年のようです）統計をとつてみたら、百年のあいだに二三〇人近い受洗者があつた。そのうちほぼ六五パーセントの人については、転会・逝去・現住会員として把握できた。しか

しそれ以外の少なくない人々が別帳や不明で教会から切れていた、と。そう記した上でその牧師は、地方の伝道の困難な状況を知悉しつつも、さらにそこには教会側の問題もあったのではないかと問うています。「伝道主義的熱心」はあっただろうが、キリスト教信仰とは教会と必然的に結びつく「教会的信仰」にはかならないという認識も訓練もきわめて乏しかったのではないかと指摘しています。救いが個人的・私的なものとして説かれ、また受けとられて、キリストの勝利の支配にあずかるものとして救いという理解が十分ではなかったのではないか、キリスト告白の問題がそこにあつたのではないかと聞いています（『福音と世界』、一九九六年三月号、池田伯氏の書評文）。

私もまったく同感です。今日の聖句、神は私どもにおいて善い業を開始してくださいただけではない、それを完成してくださいという御言葉は、深い慰めに満ちたものですが、何かロマンチックな約束として受け取られるべきではない。個人主義的ないし私的にだけ理解されるべきではないのです。

「キリストの日」は私どもがみな神の前に立つときでもありません。「神の裁き座の前」（ローマ14:10-12）に立つときです（使徒10:42, ヤコブ5:8）。私どもにおいて始まった業が完成されるとは、私どもが神の御前に頭こぶを上げ、背筋を伸ばして立つことができるということです。キリストの支配のなるとき、神の民としての私どももみな救われるということです（フィリピ3:20）。

こうしたことを踏まえたときにこの聖句は私どもにとっていつそう慰めに満ちたものとなるのではないのでしょうか。「始まりは完成を担保する」（ベンゲル）。神の善い業の始まりは完成をすでにうちに含んでいるということです。私どもにおいて開始された神の業もキリスト・イエスの日に、主の日に完成されます。そのことにいま信賴したいものです。

3 その日に備えて

聖書の小見出しは「フィリピの信徒のための祈り」となっています。詳しくはそのためのパウロの祈りです。もし小見出しが「フィリピの信徒のための祈り」ではなく北三番丁の信徒のための祈りとなっていれば、私にとっても皆さん方にとってもよほどリアルに聞こえるんだろうななどと考えて今日の説教を準備していました。そのように受け取りたいものです。

わたしはこう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように（9-11）。

フィリピの信徒に対しパウロが確信してやまないのは、彼らの信仰は、それを開始

した神ご自身によって、キリスト・イエスの日まで完成されるであろうということでした。

そのとき私どもの信仰は完成されます。キリストのご支配にあずかり、私どもは救われます。このキリストの日はまた私どもが御前に立つときです。とすればこのキリストの日に神の前にしつかり立つことができるように生きるということが私どもの歩みの、私どもの人生の目標でなければなりません。九節以下でパウロが語っているのはそのことです（ヤコブ 5:7-8、第二ペトロ 3:11）。

そのためにここでパウロは第一に「あなたがたの愛がますます豊かに」なるようにと願っています。口語訳はこう訳しています。「あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり」。愛とは自分本位ではなく、相手の人の立場になって、相手の人を中心に考え語り、そして行動することですが、それはたんに情緒の次元のことではなくて、つねに知識によって裏打ちされていなくてはならない。鋭い感覚となって私どもを導くものでなければなりません。それは何のためか。第二にパウロは、キリストの日に責められることのないようにいまここで何が重要かを判別していかなくてはならないからと勧めています。そうして第三にパウロは、そうした私どもの歩みによって、私どもの人生が神の栄光を現すものであるようにと祈っています。

私どもの信仰を神はキリストの日まで完成してくださる、私どももまたキリストの日に神の前に立つことをおぼえながら、私どもに与えられた信仰の道を、教会の信仰の友と共に歩むのです。

「キリストの日」について、もう一度、触れて終わりたいと思います。その日私どもは例外なしに神の前に立つ。神の裁きの座の前に立つ（ローマ 14:10-12）。しかしこの裁きの座に私どもに味方し私どもの弁護をする方、執り成しをする方がおられます。それはイエス・キリストです。「だれがわたしたちを罪を定めることができましょう。死んだ方、いな、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださいなのです。だれがキリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう・・・他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（8:34-39）。このキリストの執り成しによって、その日、私どもは頭こぶをあげ背筋を伸ばして御前に立つのです。その時まで神は私どもの歩みを導き支えてくださる。これを信じて進んでまいりましょう。

(二〇一八・一〇・二八)